029　桧塚　010422

◎今日の山は“三峰山みうねやま”にしようか“桧塚奥峰”にしようか、走りながら高見トンネルまでに決めようなんていい加減な考えで走っています。茨木で相澤・前川の両さんを乗せ、針テラスで三宅さんと合流するという計画。「どっちがいいですか」三人に聞いてみると、「行ったことが　ないところが　いいなあ」ということで、“桧塚”に決めた。

◎雲がひとつない快晴ながらなんだか薄ぼんやりしているのは黄砂のせいかな。冬に比べ暖かい、予報では20度近くまで上がるという。

◎7時に家を出て8時半に針に着いた。待ち合わせの時間を9時と言っていたので、30分ほど待つことになった。前回、御杖村に行った時とは違い、166号線を三重県へ、高見トンネルを越えてすぐの飯高市に向かう。166号線をすぐに右折なんだがとまずは上手く曲がれた。しばらく走って、五六軒しかない村の中を通り、「右折するんだが・・」と思いながらも過ぎ去ってしまった。「おかしい　ちがう・・」なんて迷いながら引き返し“中部電力青田発電所”を曲がり、ここから荒れた林道をゆっくり走る。「このみち　この道」5年ぐらい前に来た記憶をたどりながら、通行止めのところまで行き着いた。登山靴に履き替え出発したのは10時45分だった。

◎「ここを歩いたな・・」と思い出しながら40分ぐらいでマナコ登山口にやってきた。ここはマナコ谷というケタイな名の谷筋だ。林道を歩きながら持参の手造りサンドイッチをほおばる、登山口でまた、あんパンともなかをいただいた。今朝は6時前に起きて朝食なので、小腹が減っている、これだけ喰ってもまだ中腹ぐらいかな、相変わらずの健啖ぶりである。

◎「この道は　たいくつだね」なるほど、ずっと杉の植林地帯、同じ薄暗い風景が上のほうまで続いている。ただここの杉は下枝が刈られ、写真なんかで有名な、京都市の北の方、磨き丸太の杉林を思わせるきれいさには心休まる。登り始めの10分20分ぐらいは左に谷が流れる崖道、崩れた所がいくつもあり、「落ちたらヤバイぞ」と緊張しながら歩いた。何年か前にはこの程度のトラバース、なんとも感じなかったんだが、バランス感覚の落ちてきた最近は、一歩一歩に力が入る。

◎空が見えてきた、空が見えてくると尾根道まで近い、もうすぐのはずだ、なんて言い切ると、「近いと言ったじゃないか　なかなか着かないじゃないか」と声が上がるので、近いはずなんて言ってはいけないよ、なんて思っていると道が曲がり、また空が見えなくなってしまった。小屋がある、小さい小屋、山仕事のおっさん連が焚火を囲んで休憩できるようにしてあるのかな。雪が出てきた、あちらこちらに軽トラック一台分ぐらいの雪が残っている、そうだここは北斜面だ。

◎杉の植林地帯が終わり、雑木林の爽やかな森、まだ葉もない樹々の間から空が見える、今度こそもうすぐだ、よっこいしょと登りきると尾根道にやって来た、風景ががらりと変わる。ここからは樹がまばら、強い風に吹かれひん曲がり大きく成れないがんばる君がぽつぽつ生えている。上の方にてっぺんが見える。退屈な植林地帯の登りが終わり、展望が効く全部が見える、上の方にピークが見える、空が見える。1時なので、ここらあたりで昼飯にしましょう、飯を喰ってから上に行きましょう。

◎玄米ごはんに、ゴマと梅干。青野菜とベーコンと卵を一緒に炒めたおかず、美しくはないが美味いのだ。

◎桧塚奥峰にやって来た。3年ぶりだ。年々体力が落ちている、軽～くスイスイ登れた山だったが、乗越から上を見上げると、「へええ　奥峰は　あんなに上　だったか・・」と驚いた。この驚いたには裏話がある、笑ってはいけないが、道のカン違いをしている、毎度の“地図が読めない男”という症状のおかげ、なんだか右も左も、前に来た道も、すべてが頭の中でひっくり返っている、という笑い話だ。みなさんの前では平然としていた。帰って昨日の地図を、2019年の地図を、そんなこんな見比べ愕然としている。

◎飯を喰ったところからひとりでふらふらてっぺんまで。このあたり一帯は素晴らしい、オレの好きなところだ。何が好きかと言えば、てっぺんの部分に樹がない、無いわけではないが少ない、おそらく強い風が吹くんだろう、樹も地面にしがみついて大きく成れずの暮らしている、そんな樹がいい、はげ山に近い大きな塊、ポコリンぽこりん、ホンワリとしたフタコブラクダの背中だ。

◎オレがいつも行くところはで“桧塚奥峰”で“桧塚”には行ったことがないという不思議現象、今初めて“桧塚”という名称のピークがあることを知ったが、これもまたおおいにボケているね、と笑い。

◎ぼちぼち下り始めた。予報では午後から曇り初め、折りたたみ傘を持ったほうがいいということだったが、予報通りにぼんやりとした空模様になってきた。奈良と三重の県境のこのあたりは、山また山の地形、遠くのほうまでポコリぽこリの地球の姿である。広大なてっぺん部分は土が湿っているのはなぜだろう、雪は一か月前ぐらいには無くなっていると思うが、靴が2.3センチ沈み込むぐらいに地面の土がへこむ。台高という名前、大台河原と高見山を結ぶ山系の名前だそうだ。大台河原は雨降りの日が多い場所、降水量のすごい所、同じ山系のここも降水量がすごいのかもしれないね。

◎3：30登山口まで下りてきた。最後の谷筋の道は、崩れたところもあり、ロープをもって、根っこをつかんで、慎重にそろり歩いた。昔は平気だったのにねえ、と笑い。

◎4：00車まで到着。長そでシャツ一枚で快適な気候、なかなかにいい山行でした。湯を沸かしコーヒーを入れ、おやつをいただき、いい気分である。

030　古事記　　050422
三浦祐之
◎日本書記では、タカミムスヒが、ニニギを、“葦原の中つ国”の主にしようとした。地上は、オオナムジ（オオクニヌシのこと）が支配しており、討伐のために遠征を繰り返す。
◎古事記は、オオナムジが試練を経てオオクニヌシとなり、地上の主と成ったいわれを語る。

◎国譲り神話とは言葉のごまかしで、れっきとした侵略であり略奪である。高天が原のアマテラスが、「地上はなんてすばらしい国だ　これは　自分の子どもが支配する国だ」次々遠征軍を派遣して奪い取ってしまう。

◎因幡（稲羽：古事記では）シロウサギ：オオナムジ（オオクニヌシの幼名）は巫医：メディカル・シャーマン呪術的な力で病気を治す医療を施す。未開社会では王が呪術的な力をもっていなければならない。

◎先生は、出雲が当時“強大な王国”だったのでは・・？　とにおわしている。さてさてそれは面白い。

◎古事記が大きな分量をもって、出雲の神々を語るのはなぜでしょう。出雲系の神話を無視しても天皇家の歴史は語れる。日本書記には出雲神話は存在しない。
◎先生：出雲の神々の活躍を語る神話、出雲の神々の系譜を語るのは、出雲の強大さ、地上を最初に支配したのは出雲の神々だと、古事記が主張しているようです。

◎オレ：「なんで出雲なんだ　出雲なんて　ヤマトから見れば　ひとつの　小国だったのでは・・」と思っていた、本居宣長もほとんどの学説もそうだったらしい。古事記の中で、出雲神話を読んでいると、日本海側の国々、筑紫・出雲・古志（越）の国の日本海ベルトが見えてくる。

◎幼少の頃から、日本海側は“裏日本”と教えられ、B 級品のように思っていた。この 10 年ぐらい、縄文時代の話、継体天皇の話、江戸時代の話・・などで、ほおう、そうだったのかと頭の中が逆転しかかっている。奈良、京都の近くで育ったせいか、かつての日本は京阪神を中心に、瀬戸内海や伊勢に通じるところが日本の中心であり、その他のところは“田舎”と思っていた。

◎継体天皇のことは、はっきり知っているわけではないが、滋賀、福井、石川あたりがルーツだと聞き、「なんでそんなところ出身のものが　天皇になるのかな・・」と驚いた。

◎江戸時代、菱垣廻船、樽廻船があるということは知っていた。敦賀、富山、新潟には江戸時代からの豪邸があり、「こんな田舎で　儲けた方々が　いたのかな」ぐらいに思っていた。菱垣廻船は北海道から日本海側のいくつもの港に寄港して、大阪に荷を運んでいた。樽廻船は大阪から江戸に向かう、酒の樽専用の船だったようだ。前置きの話はここまでで、戦争前ぐらいまでは、新潟県の人口が日本で一番多かったと聞き、驚いた。

◎先日来興味をもって見ている縄文時代の話。縄文人が多く東北、中部地方で暮らしていたという。縄文人は現代日本人のルーツのだということもわかってきた。縄文人は日本海側にも太平洋側にも住んでいたようだ。

◎荒神谷遺跡：1983 年　広域農道建設時に発見　銅剣 358 本　銅鐸 6 個　銅矛 16 本　出雲風土記に出雲郡（いずものこほり）と記載されたあたりから出土した。弥生時代のもので、それまでは日本全国で、銅剣の出土はは 300 本余りだったので、大きな出来事でした。BC2～1 世紀となっているが、青銅器が造られたのはおよそ 2000 年前。

◎出雲大社：2000 年に本殿前の地中から発見されたかつての巨大な柱。直径 1.4M を 3 本束ねたものだった。今まで、「神話の中だけの話　そんなデカイ社が　出雲には無いよ」と言われていたが、柱の遺構が見つかり巨大社が、「本当にあったのだ」と驚かれている。

◎加茂岩倉遺跡：　荒神谷遺跡から 3 キロほど離れた所から、39 個の銅鐸が出土した。

◎四隅突出型墳丘墓：ヒトデの形をした古墳で、この形が確認されたのが 1970 年ころで、それまでは全国の古墳と同様に考えられていた。弥生時代の終わりころに、出雲を中心に、日本海側に、四隅突出型墳丘墓が造られたのが 1800 年前ころ。古墳時代になるとこの形は無くなってくる。

◎銅剣は世界的に出土している。日本のものは弥生初期に大陸から伝来している。武器であり、祭器であった。

031　古事記　　070422
◎高志の国へ。ヌノカハヒメ：妻問いの旅。出雲から越の国、新潟へ。うたを歌った。
◎妻問いの旅というけれど、侵略なのか、戦争なのか、翡翠を盗みに行ったのか・・。行く先々で女性を漁っていく、なかなかに英雄譚だねえ。

やちほこの　神のみことは　　ヤチホコの　神と呼ばれるわれは
やしまくに　妻まきかねて　　治める国に　似合いの妻はいない
とほとほし　こしの国に　　遠い遠い　越の国には
さかしめを　ありと聞かして　　すぐれた女が　いると聞かれて
くはしめを　ありと聞こして　　美しい女が　いると聞かれて
さよばひに　あり立たし　　妻を求めて　お立ちになって
よばひに　　ありかよはせ　　妻問いに　遠くもいとわずお通いになり
たちがをも　いまだとかずて　　太刀の紐さえ　解くのももどかしく
おすひをも　いまだとかねば　　旅の衣を　脱ぐこともせず
をとめの　　なすやいたとを　　乙女ごの　お眠りになる板の戸を
押そぶらひ　わが立たせれば　　ガタンガタンと押し続け　わが立ちなさると
引こづらひ　わが立たせれば　　グイグイと引き　わが立ちなさると
あをやまに　ぬえは鳴きぬ　　夜も更けて青い山には　ヌエめが泣いた
さのつとり　きぎしはとよむ　　時は経て　野中の雉が声響かせる
にはつとり　かけは鳴く　　にわのニワトリ　夜明けを告げる
うれたくも　鳴くなるとりか　　憎い奴らだ　うるさい鳥どもめ
このとりも　打ちやめこせね　　こんな鳥など　叩きのめして息の根止める
いしたふや　あまはせづかひ　　つき従う　天をも駆ける伴たちよ
ことの　語りごとも　こをば　　お語りいたすは　かくのごとくに

◎ひらがなを口に出して読んでみるが、なかなかに訥弁ですんなりとは読めない、すんなりとは出てこない。単語のひとつひとつ、音の様々が、わかりにくい言葉だけれど、なんだかこれは歌になっている、この文句を歌って、踊れる、そういうものだったのかな・・。

◎オオクニヌシの別名、ヤチホコは新潟県に現れる。
美しく、賢い姫がいると聞き、何度も足を運ばれた。太刀も下ろさず、旅姿のまま、姫が寝ている宮ノ前で、戸が開かないので、開けて欲しいと押したり引いたりして佇んでいると、ヌエが泣き出してしまった。続いて朝を告げる、雉や鶏も鳴きだした。いまいましくも鳴く鳥なんて、打ち殺して、鳴くのを止めさせたい。

◎ヤチホコの神よ、私は萎えた（ヌエにかけている）草のようなか弱い女、海辺の鳥のように波にソワソワ怯えてします。今はわがままな鳥ですが、後にはあなたの鳥になるでしょう。ですからどうぞ鳥を殺さないでください。青々と生い茂った山に日が沈み、夜になったら、朝日のような笑顔でおいでください。そして力強い腕で、私の胸を抱きしめてください。互いの手を枕とし、足を延ばして、お休みください。どうぞ恋しさのあまり、早まったことをなさらないで、ヤチホコの神よ。こうして、その朝は別れ、翌晩に結ばれた。

◎ヌノカハヒメ：奴奈川：現姫川：糸魚川の源流には、日本唯一の翡翠が産出した。縄文時代から加工されたヒスイ製品が、日本全国から出土している。5000 年前の翡翠加工は世界最古らしい。弥生・古墳時代までは、ヒスイ製品は珍重されたが、それ以降忘れ去られ昭和初期まで外国産だと思われていた。昭和初期に、糸魚川で翡翠が再発見され、「日本でも　翡翠が産出した　古墳から産出する翡翠製品は　国産だった」ということになった。

◎ヌノカハヒメ伝説：色浅黒く美しき方ではおはさざりき。オオクニヌシに伴われ、能登へ渡らせたまひしかど、御仲みしましからず、逃げ帰らせたまひ。その後悲劇が・・。

◎オオクニヌシとヌノカハヒメのラヴシーン。
◎オオクニヌシとスセリビメのラヴシーン。
神話の中の神様も、若い男女に戻って、おおらかに愛を姓を享受しているさまがみえる。
「いっしょに身体を伸ばして休みましょう」お互いの首に腕をかけ、抱き合いました。

032　古事記　　110422

◎タケミナカタ：この神の名は日本書紀には出てこない。

◎国譲りというけれど、侵略であり、征服であり、戦争だよね。
◎国譲りの復習：高天が原の神々が合議して葦原中つ国に派遣したのはアメノホヒでした。
◎アメノホヒではオオクニヌシに丸め込まれ、3年間も返事がなかった。

◎次が、アメノワカヒコ。アメノワカヒコは地上に降りるとすぐに、オオクニヌシの娘、タデルヒメと結婚し、地上を自分のものにしようと企み、8年も連絡をしなかった。業を煮やした高天が原は、ナキメという雉の神を派遣して様子を探らせた。アメノワカヒコは天つ神より与えられた弓矢でナキメを射殺した。その矢がタカギムスヒとアマテラスのところまで届いた。「この矢は　アメノワカヒコに　与えた矢ではないか」「もしい背いていないなら　矢は当たらない」と地上に向かって矢を放つと、朝方、寝ていたアメノワカヒコに矢が当たって、死んでしまった。

◎次に、タケミカヅチとアメノトリフネの二神が遣わされた、イザサの浜で、オオクニヌシにたずねた。
◎「私は　アマテラスと　タカギムスヒに命じられ　来ました」「あなたの支配する　葦原中つ国は　アマテラスの御子が統治する国である　あなたの気持ちは・・」
◎オオクニヌシが、「私は申し上げられない　子の　コトシロヌシが　答えるでしょう」
◎コトシロヌシは、「恐れ多いことです　差し上げましょう」と言って隠れてしまった。
◎オオクニヌシが、「私の子の　タケミナカタが　おります　そのほかはおりません」
◎タケミナカタがやって来て、「だれだ　わしの国にやって来て‥まずは力比べをしようでは・・」
◎タケミカヅチの手が、つららになり、剣の刃になった。次にタケミナカタの手を握りつぶし、投げ飛ばした。
◎タケミナカタはただちに逃げた。それを追って科野国（しなの）の州羽海（すわこ）まで行き殺そうとした。タケミナカタは、「殺さないでください　葦原の中つ国は　差し上げましょう」

◎オオクニヌシは、「二人の子は同意したなら　葦原の中つ国は　差し上げましょう」
◎私の住まいは　宮柱を太く建て　高天が原まで　千木が届くように高く　祭ってください」こうして、出雲の多芸志（たぎし）の小浜に天の御舎が造られました。
◎この大きな建物は、神話の中だけの話とされていた、実物が建っていたとは考えられてなかったが、先年巨大柱の遺構が出土した。

◎タケミカヅチはおのれの手をタケミナカタに握らせたが、握らせたと思う間もなく自らの手を立ち冷えに変え、またすぐに剣の刃に変えてしまった。いかなタケミナカタもおのれの力を示すことができず怖気づいて手を引っ込めてしまった。次に、タケミカヅチはタケミナカタの手をつかんで、まるで萌え出たばかりの葦でもつかむがごとく握り潰し、身体ごと放り投げた。さすがのタケミナカタも逃げ去ってしまった。

◎タケミナカタ：立派な（タケ）ミナカタ（水潟：諏訪湖のこと）　出雲から州羽（諏訪）に逃げて行った。出雲から諏訪にはどのようなルートで進んだのか。間違いなく日本海を進んだと先生は考える。ヤチホコ（オオクニヌシの別名）が、高志（越：新潟）のヌナカハヒメに会いに行ったのも、日本海を通り対馬海流に乗って東に向かった。
◎糸魚川と諏訪は姫川沿いに、塩の道としての千石街道は縄文時代からつながっていた。諏訪湖の北で採れる黒曜石が北陸各地から出土している。

◎古事記神話は遠い昔に忘れ去った日本海文化圏の記憶を残存させる貴重な神話であるとみなすことができます。天皇家を中心としたヤマトの世界が日本列島を制圧する以前、出雲と州羽、あるいは出雲と高志や筑紫との間には、日本海を通路とした文化の交流や物資の流通がさかんに行われていました。

◎四隅突出型方墳は出雲、富山を中心に存在する。
◎素環頭鉄刀がでてくる。
◎巨木文化、翡翠文化、海女（海洋泯）福岡の安曇一族が信州の安曇野に定着した。

033　綿向山　110422

◎「以前　登った　綿向山に　登りたい　その時は　桜が　まだの頃かな」という希望の声にこたえ、駐車場にやって来た。調べると2015年3月30日に5人で登っている。綿向山は澤山さん一行と二度ほど来たことがあり、今回で5回目ぐらいかな。駐車場が西明寺というお寺のそばだったと思い出しながら、いざ寺まで来ると、駐車場がわからない。2.3度行ったり来たりして、「おお　ここだ　思い出した」先に到着していた三宅さんと合流した。

◎茨木からは100キロで2時間半もかかった、しかも高速道路を使っている。三宅さんは南山城村から60キロぐらい、1時間ちょっとで着いたという、これはなんだろうね。車での移動は街中を通ると時間がかかる罹る、これは仕方がないよね。旅をしていると、「すぐそこだよ」といわれ、「それじゃ　歩いていけるのかな・・」「とんでもない　10キロはあるよ・・」てなことがよくある。車で10分のすぐそこは、住まいの近所、茨木では1キロ2キロしか進めないが、このあたりでは10分で10キロぐらいは行ってしまう。

◎10：30出発　すぐのところに、「綿向山麓接触変質地帯」という石碑と看板がある。「変化しない代名詞のような岩石の中から、母なる大地のダイナミックな変化を感じ取ることができます」「接触変質岩」古生代に生まれた石灰岩と粘板岩に、花崗岩（マグマのことかな）が貫入した際、その膨大なエネルギーにより変化した岩石です。石灰岩は熱により大理石化し、厚みは10センチにもなる。地質学的に貴重な地域です。いろいろネットで検索したがそれ以上は出てこなかった。透明やら茶色やらの混じった宝石に近い石ころが、2000円とか5000円で売っている。もうちょっとこのあたり、探索しないとわからない、なんだかすごいものがあるのやも。

◎御幸橋駐車場からすぐに、ヒミズ出会い小屋がある。右折して水無瀬山の方に向かった。「警告：冬季は滑落の危険」の張り紙があった。急な登り、人が少ない道、急斜面を横切るトラバース道が多い登山道、こわいコワイ、やれほれ、どっこいしょの道である。ロープが出てきた、落ちたらヤバイぞ、ロープをつかんで、木の根っこをつかんで、慎重に歩こう。

◎空が見えだし林道に出たので休憩。もう15年ぐらい前だったか、てっぺんからこのコースを降りてきた。「いや～　怖いな　落ちないように」と当時も緊張して歩いていたのを思い出す。そんなオレももういい歳、バランス感覚が、平衡感覚が、しっかりせんといかんぞという全ての感覚が衰え、ぼやけてきている。

◎50歳代の二人組が早足で登ってきた。「うへえ　早いな・・」と思い感心していたが、当時のオレも、この程度の山は、スイスイ2時間3時間で登って降りていた。氷ノ山もスキー場から登って降りて、「なんだすぐじゃないの・・」とほざいていたものだ。そんなに早く歩いてしまうと、山をかみしめていない、しみじみ感じていない、単なる特急列車だったね。いまはその倍の時間をかけてエンヤコラ楽しんでいる。

◎長そでシャツ2枚で快適だ。予報通りに今日は快晴とはいえ、空気はいささかぼんやりしている。ヒノキの植林地帯、斜度のきついところににょきにょき桧が立っている。ところどころにかつての炭焼き窯の穴、細いほそい道がしかも斜めについている、ロープをつかみ、木の根っこをつかみ、恐る恐るスイスイ進む。ほとんどがそんなトラバース道。トラバースとは：斜面を水平に進むこと。

◎水無瀬山の分岐点を過ぎ、樹々が無くなりもうすぐてっぺんという雰囲気になって来た。ピリピリする危険地帯もそれなりに気持ちがいい。下の方に田畑や建物が見えている。昼はとっくに過ぎているが、休憩のたびに食いものが出てくる、サンドイッチも喰った、饅頭、羊羹、チョコレート、バナナ・・いかなオレでも飽食気味である。

◎八合目だ、九合目だと上がっていって最後に百段ぐらいの階段、「うへへへ・・」と登りきると見覚えのあるてっぺん、祠があり、大きなケルンがあり、向こうの山々が見える。もう2時なので殆んどの方々は飯をすませて下っていったようだ。

◎ここも夏道と冬道がある。坊村から登る武奈ヶ岳にも夏道と冬道がある。冬の雪でトラバースの谷筋は道が雪に埋もれてしまうので、尾根道を歩きなさいという冬道だが、この暖かい季節になって夏道も難なく通れる。とはいえまだ通行止めの看板が出たままになっている。

◎さあ帰ろうと歩き出すと、「そっちは違うよ　方向が違うよ」とまたまた叱責され、いつものチョンボをしてしまった。雨乞岳の方に行きかけたようだった。

034　古事記　160422
三浦祐之
◎天孫降臨に移る前に、今少し国譲りの話、出雲の話、先生の話。

◎天照大御神之命以＜アマテラスの命によりて＞、豊葦原の千秋の長五百秋（ながいほあき）の水穂の国は、我が、御子、正勝吾勝々速日天忍穂耳命＜マサカツアカツカチハヤヒアメノオシホミミ＞の統べ治める国である。
◎アメノオシホミミ：アマテラスのスサノオのウケヒにより生まれた、アマテラスの順位第一位の後継者。マサカツ：正勝：本当に勝った、アカツ：吾勝：私が勝った、カチハヤヒ：勝速日：勝って勢いのある、誉め言葉がつく。
◎豊葦原の千秋の長五百秋（ながいほあき）の水穂の国：地上を言う最大の誉め言葉：葦原の中つ国のこと。
◎葦原の中つ国：高天原のアマテラスから見て、葦の茂る未開の荒野という侮蔑的な表現。のちに天つ神の子孫：天皇：が統治することで、そこは稲穂の茂る豊かな世界になることが約束される。
◎このあと、天つ神による地上制圧の物語が展開する。従来は国譲りと呼ばれており、円満な譲渡という印象を与えるが、武力的な制圧、政治的な力による屈従といえる。
◎「国譲り」という言葉は、記紀に用いられていない。明治末ごろから使われだした。本来は天皇から天皇に、皇位を穏やかに譲る時に用いられた言葉。血を流すことなく平穏な政権移譲が行われたイメージを作るために、「国譲り」の呼称を、明治末以降流布させたのではないのか。

◎三回目の使者タケミカヅチ、オオクニヌシの第一子を隠れさせ：（先生曰く、殺してしまったのでは。）、第二子を諏訪まで追い詰めた。「汝の息子の二神は　天つ神の御子に背かないと約束した」
◎我が子ども、二神が申し上げた通り、葦原の中つ国は、お言葉のままにたてまつろう。ただ、わが住処は、天つ神の御子が、代々に日継ぎしご支配なさる、ひときはそびえる大殿のごとくに、土の底なる磐根に届くまで宮柱をしっかり掘り据え、高天原に届くほど氷木を立ててお治め下さるなら・・。
◎先生はうなる。新たな宮殿を造営するという研究者が大半である。そうではなく、従来から存在する宮殿を守り通す、ということでないのか・・。
◎本居宣長の古事記伝では、この宮殿を造ったのは、天つ神であると解した。
◎出雲大社のような壮大な建造物を、出雲の辺境の者たちが、単独で造れるわけがない、という偏狭なヤマト絶対主義がそう言わせた。天皇家の祖先でないといけないという偏狭主義がそう解釈させたのでは・・。

◎スサノオが地上に降り、出雲でヤマタノオロチを退治した物語は、すべて出雲を舞台にして出雲の神々の活躍を語って来た。古事記神話の四割を越している。これほど多くの割合を占めて、出雲の神々の物語を語らねばならなかったのか、そこに古事記という作品の本質がある。
◎古事記は決してアマテラスや天皇家だけに向いて語られ描かれた書物ではないと先生は主張し続ける。そこには滅びの眼差しが濃厚に窺える。神話におけるオオクニヌシがその典型であり、あとに出てくるヤマトタケルも志半ばで死んでしまう御子や人に対して、語り手の目線が向き合っている。
◎日本書記にはそういう認識が、全く窺えないのは、国家の正史として当然と言える。

◎その昔、出雲に一大勢力があったというのは素晴らしい。弥生時代に中国朝鮮から大陸文明をもってやって来た。縄文人と渡来人が混じっていき、1000 年 2000 年の時間の中で今の日本人ができてきたのかな。難しいことは学者に任せるとして、日本海側でたくさんの人が暮らし、交流があり、話があり、子孫がどんどん増えていった。そういや、「あいつ　ちょっと　日本人　ばなれした　顔だね」という人がたくさんいる。“日本人ばなれした顔”は往々にして格好がいい、身体がでかい、目鼻立ちがすっきりしている、色が浅黒い、これらがいい方に振れて羨ましいねえという感じの人が多い。それほど日本人は不細工なのか、オレが醜男なのかと笑いが続く。
◎オレは気候の温暖な、雪の少ないところに住んでいる。「日本海側は　いやだ　雪が降る　雨が多い　冬の長い期間を　家の中で　籠っての生活は　いやだ」こういう話もよく聞く。
◎弥生時代は　九州、出雲、若狭、越、東北、なんてところが人でにぎわっていた絵柄が浮かんでくる。

035　古事記　180422
◎いよいよ天孫降臨に移る。あらすじを、ざっと。

◎アマテラスは三種の神器となる、＜やさかのまがたま＞八尺の勾玉・＜やたのかがみ＞八咫鏡・＜くさなぎのつるぎ＞草薙剣　これを授け鏡を自分自身だと思って、地上でも祀るように命じた。
◎八人の同伴者がいた。アメノコヤネ・フトダマ・アメノウズメ（芸能の神）・イシコリドメ（鏡制作）・タマノオヤ・アメノタヂカラオ・オモヒカネ（知恵の神）・アマノイワトワケ

◎天と地の分かれ道で、大いなる光に包まれる。「わが名は　猿田彦神：サルタヒコ　道案内にはせ参じた」
◎鼻の長さが七咫 120 センチ、背が七尺 210 センチ、口と尻が明るく光り、目は丸く赤く輝きと異形の姿。

◎ニニギは、仁紫（つくし）の日向（ひかむ）の高千穂の久士布流多気（くじふるたけ）に天より降り立つ。
◎ニニギは、ある日、笠沙の岬で、美しい乙女にで会い、一目ぼれ。
◎「オオヤマツミの娘です」「カムアタツヒメ　またの名を　コノハナサクヤビメ　と申します」
◎ニニギは、父親のオオヤマツミのところに使いを出し、娘との結婚を申し出た。

◎オオヤマツミは大喜びをして、コノハナサクヤビメ　と　姉の　イワナガヒメ　の二人と結婚するように申しで、たくさんの贈り物と共に二人を送り届けた。当時、姉妹が一人の男に嫁ぐ姉妹婚の風習があった。
◎ニニギは、姉のイワナガヒメを見て、その醜さゆえに送り返し、コノハナサクヤビメだけを留め置いた。
◎父のオオヤマツミは悲しみ、言った。二人を使わしたのには理由があります。
◎姉のイワナガヒメは、石のように硬く、長寿を意味します。
◎妹のコノハナサクヤビメは、花のように栄えますが、花のように短い寿命になるでしょう。
◎このため代々の天皇には寿命があるのです。

◎一晩を共にしたコノハナサクヤビメが、ニニギに、「私は妊娠したようです　天つ神の御子です」
◎ニニギは、「たった一晩だけだから　わたしの子ではあるまい　国つ神の子だろう」
◎コノハナサクヤビメが、「子が　国つ神の子なら無事に生まれない　天つ神の子なら無事に生まれるはず」
◎広い八尋殿（やひろどの）を作り、御殿の中に入り、戸を土で塗り塞ぎ、陣痛が始まると、御殿に火をつけました。その火の中で、コノハナサクヤビメは、無事に御子を生みました。
◎火がさかんに燃えている時に生まれた子は、ホデリ、次に、ホスセリ、次に、ホヲリ、三人生れました。

◎長男：ホデリ：海幸彦：釣り道具を使って海の幸を獲る。三男：ホオリ：山幸彦：弓矢を使って獣を狩る。
◎ある日、弟が兄に、「お互いの　釣り針と　弓矢を　交換しないか」ともちかけ、兄は渋々交換しました。
◎山幸彦のホヲリは、海に魚を釣りに行った。釣るどころか、兄から借りた釣り針をなくしてしまった。
◎海幸彦のホデリも慣れない道具ではうまくいかず、「山佐知も己が佐知さち　海佐知も己が佐知さち」「元に戻そう」と言った。
◎弟ホヲリは、兄ホデリに、針を無くしたことを伝える。兄ホデリは、針を返せという。
◎弟ホヲリは、自分の十拳剣で 1000 個の針を造り渡そうとするが、兄は、自分の針がいいと拒む。

◎弟ホヲリは、悲嘆にくれ海辺で泣いていた。海神ワタツミが現れた。「籠の船に乗り　流れていると　ワタツミの宮殿が見える　ワタツミの娘が　あなたを救ってくれるだろう」
◎海神の父は、ホヲリが天孫と知るや、ワタツミは豪勢なもてなしをし、娘のトヨタマビメと結婚させる。
◎弟ホヲリは、3 年経って、兄ホデリの針を探しに来たことを思い出し、ワタツミとトヨタマビメに相談した。
◎ワタツミは、魚たちを呼び集め、赤代の喉に兄ホデリの針を見つけた。
◎ワタツミはホヲリに言った。「この針は　おぼ針　すす針　貧針　うる針　」言いながら針を渡しなさい。
◎ホヲリはワニに乗って帰った。

◎兄弟二人は農耕をした。兄ホデリの田は育たず貧しくなり、弟ホヲリを攻め込んだが、負けて降参した。
◎トヨタナビメがホヲリを訪ねてきた。天つ神の子が授かったので、陸地で産みます。決して覗かないで。
◎ホヲリが産屋を覗くと、出産でのたうつ姿がワニでした。
◎トヨタナビメはホヲリが覗いたことに失念し、宮殿に帰ったが、母の代理として妹のタマヨリビメを遣わした。天孫降臨のニニギから、海神の力を得たホヲリ、そして、その子ウガヤフキアエズを、日向（ひむか）三代と呼ばれる。その子孫が初代、神武天皇となる。

036　赤坂山　210422

◎今日は快晴、お陽さんがギラギラ照っている。8：30に安曇川の駒田織布で三宅さんと待ち合わせをしている。綿布が無くなってきたので注文したものをもらいに行く。いつもの120センチが無く、97センチのものを100メートル勝った、11000円也。

◎Gパンに使うような厚手の綿布。画材屋に売っているキャンバスじゃいやだ、綿布のキャンバスを使いたい、そんなことを言って使いだしてもう何十年になるかな。パネルに布を巻き込んで貼る。サイドも込みで糊を塗る。乾いたらホワイトジェッソ、また乾いたらホワイトジェッソ、ジェッソにジェルを混ぜるのがお気に入り。適度にはじき、適度に吸い込む。なんて今では自作のキャンバス造りもベテランになったが、初めの頃は皺がよる、ぼこぼこになる、ベニヤ板のパネルから剥がせない、「あちゃちゃ　失敗だ」という連続だった。時々市販のキャンバスで描くこともあるが、初心者のようでいかにもぎこちない。

◎朝6時過ぎに家を出たが、この時間だと京都を超えるのに渋滞で時間がかかりそうで、山崎ICから京都東まで高速を使った。30分ほど早く着き琵琶湖を見て時間をつぶした。

◎布屋さんで時間を喰ったので、さらさ温泉の駐車場には11時ころになってしまった。日が暮れる時間が遅いこの季節はのんびりできるのでありがたい。

◎車を止めたあたりからぶらぶら歩く。なだらかな斜面ではゲートボールやら、日帰りキャンプやらの人で賑わっている。昔はここに小さいスキー場があり、コテージが10軒ほどあり、トイレがいくつもあるところ。歩きながら、車に地図を忘れてきたことに気付いた。「ま　いいか　知ったところだ」と言いながらいつも道に迷っているおっさんでもあります。

◎「ええと　どっちだっけ・・」と左右を見回し左のスキー場斜面を登りきったところから登山道が始まる。イワカガミの葉っぱがキラキラ、なんだかたよりないカタクリが咲いている。しばらく登ると針葉樹、スギかヒノキか・・「葉っぱが　尖って　いるのでスギだよ」「あ　そう」

◎「ああ　空が見えてきた　もうちょいで　乗越じゃないかな」えいさあこらさあ。今日は少し寒い、風が冷たい、先日の綿向山はほこほこしていたが冷たい。近畿南部と北部の違いなのか、今日が涼しいのかわからないが、このあたりの気候は嶺北地方だというので、江若尾根は寒いのかもしれない。

◎ブナ林になって来た、人の胴回り、イノシシの胴回りぐらいの若くて元気なブナ林がグイグイ立っている。若葉が出てきているもの、まだ枝ばかりのもの、ブナがにょっきにょっき。

◎乗越にやって来た、寒風と書いてある、「かんぷう」と読むようだ。風がきつい、それこそ寒風が吹く、長袖シャツ2枚の上にジャケットを羽織った。出発が遅かったので乗越直下で弁当を広げた。

◎晴れてはいるがなんだかぼやけている。真下のマキノの田畑やら建物は見える、メタセコイヤの並木は田畑の緑に溶け込んではっきりしない。琵琶湖は見えるが対岸はまったく霞んでいる。伊吹山や鈴鹿山系はまったく見えない。赤坂山の鉄塔が見える、その向こうの三国山も見える、行ったことがある黒河越、乗鞍岳もかろうじて見える。

◎尾根道を歩いている。このあたり、うしろの大谷山、前の赤坂山、もっこり拡がった尾根道なれど樹がほとんどない。樹がまともに立っていられないほどの強い風が吹く地帯なのかな。700,800メートルぐらいの低い所なんだけれど、見渡せるぐらいの範囲に樹がないとはすごい。だけど気持ちがいい所、麓の地面がすぐそこに見えるようなところ、厳しい環境なのかもしれない。以前、夏に来た時には草ぼうぼうで、登山道の踏み跡さえわからないぐらいに茂っていた。今の季節は、ようやく雪が融け、さあこれから草の季節だと満を持しているのかな。何度も言うが、ほんとうに気持ちのいい場所だ。

◎栗柄峠から武奈の木平まで下りてきた、ここには東屋がある。10年以上も前の冬、東屋からちょっと進むと谷筋で道が細くなり、その先が進めなかった。細い谷筋を先の方まで詰め、右にまわって登らなければいけないところ、その細い所、雪が積もって道がわからなかった。「これはわからない　進めない」とそのまま引き返したことを思いだした。今は3時半ごろ、涼しい風が吹き出した。

◎4時過ぎに車のところまで帰って来た。さあどこで車中泊をしましょうかと相談した。今車を止めているところで、コンロを出して食事をするのは憚られる。琵琶湖のそばに行ってみましょうか、ということで車を走らせた。マキノのメタセコイヤの並木道が素晴らしい、ぼちぼち、若葉が芽吹いている。琵琶湖にやって来たが、「ここは　だめでしょう　どこか知ってますか」「それじゃ　トイレがあって　人がいなくって　かっこうの場所がある　案内します」

◎そのかっこうの場所に着き、我々だけの車を二台止め、机を、コンロを、椅子を、ボンベを並べた。ビールを出し、ワインを出し、焼酎を出してまずは乾杯。「てっちゃん鍋を用意した」「いただきます」ダウンの上着を着て寒空の中、久しぶりに一杯機嫌、話して笑って楽しんだ。

037　古事記　260422
◎前回、天孫降臨のおおよそのあらすじを書いてみた。「ほおお　海幸彦　山幸彦　この話がこんなところに出てくるのか」そんな新鮮な発見があった。

◎出雲神話が終わった。アマテラスがあれだけ苦労して国を譲り受けたというより、略奪征服をした。アマテラスがオオクニヌシを屈服させたが、天孫降臨の舞台は出雲ではなく、九州に移るのか、そんな答えがでてくるかな。

◎オオクニヌシは葦原の中つ国を平定し、長年にわたって国造りに取り組み成果を上げ、その国をアマテラス等の天つ神に譲ることになった。
◎アマテラスとタカギ（タガミムスヒ）の命で、アメノオシホミミが天降ることになっていたが、突然ニニギという子が生まれる。アマテラスの孫にあたる、ニニギが豊葦原水穂の国に天降る。
◎アマテラスから孫のニニギに変わったのはなぜか。天武天皇が亡くなり、皇后が政務をとっていたが、子の草壁皇子がなくなったため、皇后は、持統天皇として即位した。その後、草壁皇子の子で、天武天皇の孫が、文武天皇として即位した。
◎記紀神話の、個々の神話がいつどのようにして形成されたのか知ることが難しい。皇后の持統から、孫の文武を即位させること、皇位継承を正当化するよりどころとして、孫が出てきたのではないか。七世紀後半に、天孫降臨神話が成立したのではと推測される。

◎ニニギはお伴の神々を従え、先払いに仕えるアメノオシヒ（大伴連の先祖）とアマツクメ（久米直の先祖）という武神を先頭に、高天原から降りてくる。

◎さてここに、アマツヒコホノニニギ（天津日子番能迩々藝命）は、天の石位（あめのいわくら）を離れ、天の八重たな雲を押し分け、力強く道を踏み分け踏み分けて、（位都能知和岐知和岐弓：いつのちわきちわきて）、天の浮橋にしっかりお立ちになると（宇岐士摩理蘇理多多斯弓：うきじまりそりたたして）筑紫の日向（ひむか）の高千穂の霊力溢れる嶽（久士布流多気：くじふるたけ）に天降（あも）りなされた。
◎かくて、地上に降りたニニギは、「ここから　韓（から）の国に向かい、笠沙（かささ）の岬にもつながり通っており　朝日がまっすぐ射す国、夕日が照りわたる国である。故に　この地（くに）はとてもすばらしいところである」と言って、立派な宮殿を造営した。

◎天空から、高い山の頂に降りてくる建国の起源を語る神話は、朝鮮半島などの北方系の神話に共通する。3000 年前の弥生時代、日本列島へやって来た渡来人、天皇家の祖神を語る古事記・・・。

◎出雲を舞台とした、オオクニヌシ（大国主神）。天孫降臨の場所が九州の日向なのか。考えられるのは、二つの神話は連続する神話ではなかった。出雲制圧の背後には、ヤマトと出雲の何らかの対立葛藤が窺える。

◎日向（ひむか）は現在の宮崎県がそのまま重ならない。九州南部は熊襲と呼ばれ、隼人という人々が比較的遅くまでヤマトの勢力下に入らなかった。そのクマソが、ヤマトタケルのヤマト勢力の侵攻により征服され、クマソと呼ばれていた場所が、日向（ひむか）と呼ばれるようになった。8 世紀初頭には、日向が分割され薩摩の国と大隅の国が建国される。残された地が律令国政の日向の国となった。江戸時代には宮崎県北部と南部で、二つの高千穂の綱引きが行われた。幕末以降薩摩の政治力が強かったので南が優勢のまま現在に至っている。

◎九州の地図に疎い私、宮崎県を開けてみると、「宮崎県は　九州の中でも　大きな県だ」とわかった。霧島連山の高千穂峰 1573M、宮崎と鹿児島の県境、鹿児島湾まで 20 キロぐらいしかない。そこから北北東に 100 キロぐらいに高千穂町がある。有名な渓谷美の高千穂峡はこちらだ。「うちが本家じゃ」元祖、本家争いは今もつづくらしいが、本居宣長もどちらかわからないらしい。

◎先生は、神話的に始祖王は、苦難の遠征を経ながら王都へと入る建国神話の様式として存在する。降り立つ山は辺境の地、日向が選ばれたのなら、日向でもより遠い高千穂峰がふさわしいのでは・・。

◎霧島連山の高千穂峰、このあたりの山も登ってみたいね。

038　古事記　300422
三浦祐之
◎先生：古事記研究、日本神話研究はいま大きな転換点に立っています。従来の研究には根本的に誤りがあります。明治政府は精神的支柱として、天皇を持ち出し、その幻想を保証するバイブルとして、“記紀”を持ち出した。
◎これを聞いてほっとした。古事記はいたく面白いけれど・・天皇の影がうろついては・・おちおち楽しんでいられない、と、小さい声で・・。

◎大日本国憲法「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」由緒正しい起源と歴史とを記述しているとみなされた“記紀”が、この精神的支柱を受け持った。
◎天皇制が1700年ぐらい続いている、その長い歴史の間に、「天皇を排せよ　とか　天皇を誅せよ　天皇家を滅ぼそう・・」という流れはなかった。どなたかが、織田信長が生きてりゃ、やったも知れない、という話をした人もいた。
◎万世一系：天子の血統が永遠にわたって、かわらず続くこと。
◎1945年まで、学者たちも含め、日本人は記紀を同じものとして扱い、天皇制が揺るぎもなく続いた。
◎日本書記は古代律令国家を支える法とともに、中国の歴史書を模して編纂されたものです。日本はオタク等ら、中国さんやら、朝鮮さんやらと同じように、法もありゃあ、国史ある、あんたらには負けん、そういう立派な国なんじゃ。というところだね。

◎古事記の序：古事記の編纂をもくろんだのは天武天皇であり、数十年後、元明天皇の命令を受け太朝臣安万侶（おおのあそみやすまろ）が、稗田阿礼の誦習する、「勅語の旧辞」を文字化した。
◎先生は、この序を疑えという。二つの歴史書が共に律令国家の手になったとは思えない。

◎三浦祐之先生の、上記の話にほっとした、そうだったのか、今はそういう流れか、としみじみ思った。古事記を読む場合、弥生時代やら、縄文時代やらを想って、読んでいけばいい。少なくとも個人的には、天皇家のこと、天皇家が続いていることなど、横において読んでいけばいい。
◎記紀が、天皇家の身内の歴史書、そらあ自分のいいように、かっこいいように書くわな、そらあ当然じゃ、なんて思わないで・・。少なくとも古事記は、神話の話として読んでいこう。

◎何日か前にも、何かの国会答弁で、“万世一系”なんて言葉をのたまう音声が耳に入った。「今時　まだ　そんなことを言うのか・・」と苦笑したがちょっと調べてみた。
◎1947年：昭和22年：日本国憲法と同時に、皇室典範は施工された。オレが生まれたころに、敗戦の後、今の憲法ができたのだ。今の憲法よりたった60年前の、1889年、明治の中頃に、大日本帝国憲法ができあがった。そんな数字を考えてみれば、明治政府の、富国強兵の憲法がたった60年間使用されただけだったとは・・。
◎今の憲法が 75 年、日本の民主主義もまだまだ新しいものなんだと、数字のマジックで驚きと同時に、民主主義なんてのたまう口から、皇室典範なんて言葉が出てくる。オレは無知だった、皇室典範、こんなものがいまだに残っていたとは・・。オレは、個人的に、天皇家はあればいい、普通の人に徐々に近づいて、普通に楽しく存続していけばいい、そう思っている。
◎奥平康弘：現行の皇室典範は、明治のそれと、その大綱において違いはありません。

◎2か月前から、ロシアとウクライナが戦争をしている、というより、ロシアがウクライナに攻め込んでいる。それまではこの二つの国は、ソ連邦という一つの国だった。ロシアとウクライナが、それぞれの国に分かれて仲良くやっていると思っていたら、ある日突然に戦車やらロケット砲やらで、TV画像で見るかぎりウクライナの街々は、ロシアにぼこぼこに叩かれている。元々は同じ国が、兄貴分が弟分を、ぼこぼこにしている、この構造の中に外に、厄介な話が絡みに絡んでいるのだろうが、国がつぶれ、人が死ぬのを見るのはつらい。歴史をたどれば、おそらくなるほどということがたくさん出てきそうだ。人が生きている限り、人と人との絡みがあっちこっちにあって、簡単にその絡みのほつれが溶けるわけでもなし、ののしりあっているうちはいいが、一たび手を挙げると、怨念の世界から地獄絵図があらわれる。